

アリストテレスにおける〈種的形相〉〈魂としての形相〉

岩村 岳彦

『形而上学』Z巻は、「実体」と呼ばれるべきものとして「結合体」と「本質」を挙げている。「結合体」とは形相と質料とから成る具体的な事物であり、「本質」とはその事物の定義において表される説明概念、あるいはは事物の形相の説明とされるものである。つまりアリストテレスは事物の形相を、ある文脈では結合体の部分として、他の文脈では種として論ずるといふ姿勢をとっている。この姿勢はしかし、生命を持った自然物を取り扱う際に複雑な問題をもたらすことになる。アリストテレスが具体的に記述しているのは「人間」の例であるが、結合体の部分としての形相として彼が考えるのは、何らかの概念としての形相ではなく、「魂」なのである。魂としての形相と、種、本質としての形相（つまり「二本足の動物」という定義で説明されている対象）とはどのような関係にあるのか？ アリストテレスは少なくとも表面的には納得のいく説明を行っていないように見える。この点は古くから問題視されてきた。Scotusは二つの形相を区別された別種の形相とみなし、種・本質としての形相は「全体形相」、結合体の部分としての形相を「部分形相」と呼んで区別することで困難を回避しようとした。だが

無論このような処置は問題の根本的から解決するものではないだろう。「人間の説明は魂の説明でなければならぬ」とされている以上、説明対象としての種・本質と、魂とが、二つの異なる実体として別個に論じられているとみなす訳にはいかないであろうからである〔1〕。不明瞭な形であれ、アリストテレスが魂の在り方と種・本質の在り方を関連させて捉えている可能性が考えられるべきではないだろうか？ そうだとすればいかなる関連の仕方であろうか？

この稿では最初にこの問題への回答を試み、『形而上学』に関して、「生命を持つものの「働き」としての魂の役割、すなわちその始動因性が、定義の在り方についての議論と深く関わっているという事実を手がかりに、人間の形相を論ずる際のアリストテレスの二通りの見解が実は密接に関連し合っている事を指摘する。次に、その過程で明らかになるさらに別の観点について取り上げる。アリストテレスは定義の問題を論じる際に生成論の視点を持ち込むが、その延長線上に、ある特定の肉体的部位への魂の定位・局在化という機械的器官論の図式を示している。このような観点は、魂を形相、肉体を質料とみなす非機械論的論理とどう関わっているのか？ 機械的器官論と質料形相論という二つの思考の並立という問題は、『動物発生論』及び『デ・アニマ』においてより顕著に見出されるものである。以下では、特に『デ・アニマ』の記述を詳しく見ていく中で、機械論的な観点はやはり始動因としての魂の在り方の説明のために導入されたものであり、それが質料形相論を補完するものであった事を明らかにしていく。

このように、『形而上学』『動物発生論』『デ・アニマ』で、種や魂の問題を取り上げる際、アリストテレスは議論の中にいくつかの異なる思考の枠組みを取り入れている。この事は表面的にはアリストテレスの思考の一貫性の欠如を意味するもののようにも見えるが、実際にはむしろ議論をより完全なものにしようとする意図の表れてあったと理解できる余地が少なくないように思われる。その意図を汲みながら、アリストテレスのやや錯綜した

議論の構造を、少しでも分かり易く整理して示したいと思う。

定義（種概念の説明）と魂

『形而上学』Z巻の主題の一つに定義論がある。その論理的な輪郭が定まってくるのは、第10章以降であるが、議論の核心に触れるいくつかの用語法に関してやや揺れが見られることから、記述の上で思考の流れを一貫して追う事は難しくなっている。ここでは問題を形相（種／魂）に限って取り上げる事にしたい。定義論の全体を大まかな流れとして捉えるならば次のようになるだろう。まず定義とは普遍的な対象すなわち形相の説明である事、個的結合体（個的質料＋形相）の部分をなす質料的要素はその無規定性の故に説明の語句となり得ない事、の二点を明記（Z 10）した後、アリストテレスは形相の説明の内に質料からとられた表現が含まれなければならないという新たな指摘を行う（Z 11）。「家」の本質を「石や煉瓦からなる覆い」とした際、言語表現として記述の中に現れた質料（普遍的質料）^③の姿がそれである。質料を表現する記述要素が必要だとする観点は、後に「類」の役割の説明として意味を持つ事になる。すなわち類は説明における質料として位置付けられ（Z 12）^④、定義と類を規定する種差によって事物の形相を説明するものと結論される事になる。

アリストテレスが定義について考察するのは、それを論じる事が形而上学の対象である「実体」を論じる事に重なるからである。だが定義は、それが具体的な事物（結合体としての実体）について、その形相（本質としての実体）を説明するものであるという意味で、実体論と二重の仕方で関わりを持っている。言い換えれば、形而上学の文脈の中で定義は、論理の実体のみならず実在の実体との関わりという点からも取り扱われなければならない。Z巻が結合体を巡る生成論の論理を重視するのはそのような事情によっている。それを定義論の内部に持ち込むことが、二つの異なる存在論的水準の実体を一つに結び付ける事につながる訳である。だが生成論的視点

を持ち込む段階で、ある問題点が表面化せざるを得なくなる。その原因となるのは、生成物が、生物と無生物の二つの自然的事物を含んでいるという事実である。既に見た「家」の例を用いる限り困難は生じない。この場合、特定の機能（覆い）を持つものとして特定の素材（石や煉瓦）から作り出された結合体としての実体の性格が、その説明における実体すなわち本質の在り方に反映され、それと関わっているのが直接確認できるからである。問題が生ずるのは「人間」の例である。アリストテレスの議論では人間の定義は一貫して「二本足の動物」とされている。ところが、実在する人間の生成物としての在り方は、質料である肉体と形相である魂の結合体として説明されている（*Metaphysica*, Z11, 1037a5-10）。そればかりでなく、結合体に関する定義は、その質料的要素を伴わない形相の説明であり、人間の場合それは「魂の説明」だと述べられているのである（Z11, 1037a24-29）。アリストテレスが魂を人間の「第一の実体」（Z11, 1037a5）とする見解を取る時、「説明は普遍的なものについて」（Z10, 1035b35）なされ、「第一のものについて」の説明のみが定義たり得る（Z4, 1030a6-10）とする立場から離れて発言を行ってはいない（Z11, 1037a26-28）。「第一のもの」とは、「類の種」すなわち種差が限定する類によって実現した種的形相を指すものと考えられる。それ以外の何ものにも本質は存し得ないとされている（Z4, 1030a11-12）以上、それは明らかであろう。そうだとすると、「第一のもの」である人間の種的形相と、人間の「第一の実体」すなわちその魂とが、共に人間の定義の対象とされていることになる。表面的に見る限り記述は矛盾すると言わざるを得ないであろう。だが他方、二通りの見解を結び付ける接点となりうる論点が認められるのもまた事実であるように思われる。

種と魂の両者を含む形相の両義性という問題は、繰り返し言えば、人間も含めた「生命を持つもの」の例について考察した場合に生じるものである。Z巻第10章の論理に注目したい。ここでは魂は「生命を持つものの実体」とされ、「或る特定の（*τὸ ἐξ ἑ*) 肉体の、説明に関わる実体、形相、本質」と位置付けられている。そしてそ

の理由が、「(動物の)各部分は、もし正しく定義するならば、働きなしには定義されず、働きは感覚なしにはあり得ないから」と説明されている (Z10, 1035b17-18)。魂を定義における形相として取り扱う姿勢は、ここでは、動物を「生きた」ものたらしめる、その「働き」の原因としての魂の役割に着目することから導かれている事が分かる。つまり論拠は、動物はあくまで生命を持ったものとして定義的に説明されなければならないという前提から得られている。だがこれと同じ前提は、定義を類的質料と種差の結合(二本足の動物)として考察する議論の流れの中でも用いられているのである。第11章の考察は、人間が肉体の諸部分なしに存在し得ないものである以上、それ抜きに定義は有り得ない、つまり人間の定義には質料の記述(類)が含まれなければならない事を指摘するが、その理由がやはり「動物は或る感覚を持った何ものかであり、運動なしには定義され得ない。従って或る特定の状態にある (*ἐκ τούτου καὶ*) 諸部分なしには定義され得ないからである」と述べられている (Z11, 1036b28-30)。生命を持たない自然物、つまり何らかの形態、性質、機能等によって規定された質料の実体の場合、それはそのようなものとして現実在り、かつそのようなものとして定義される(家とその定義の場合のように)。ところが動物の場合、実在においても定義においても、そうした仕方での質料の規定のみでは十分ではない。動物は或る形態を持った質料や、或る機能を想定して質料から作り出されたものではない。動物として実在していると言われるためには、それは自らの持つ機能を実際に「働かせ」うるものとして存在していなければならないのである。肉体が「或る特定の」状態になければならないとはそういう意味である。「一旦生命を失った手は、もはや人間の部分と言われる事はない」(*Metaph.*, Z11, 1036b30-32)。肉体の諸部分すなわち諸器官を現実に機能させ、それらを生きた器官たらしめるものは、無論魂に外ならない。『デ・アニマ』第2巻第1章の記述はこの事の表現となっている。

「それ故魂は、可能的に生命を持つ自然的実体の第一の現実体である。器官を備えたものであれば、それが

そのような実体である」(De anima, II, 412a27-b1)。

定義対象を種的形相とする文脈を導くにも、魂としての形相とする文脈を導くにも、アリストテレスが同一の論拠を用いている事を考えると、二つの文脈を対立する二つの論理的立場の表れと断定してよいとは一概に言えなくなる。器官を「運動」させる魂が、正にそのようなものである事の故に定義の質料的部分の記述に関わらなければならぬと考えられているとすれば、そしてそのことが、魂が「生きた」ものの「説明に関わる実体」とされた事の意味を説明しているとすれば、「第一の実体」としての魂の説明を人間の定義とする発言もまた同様の思考上にある可能性を考える事ができるからである。ところで、上述の議論は、明らかに魂の始動因としての性格が了解されている事を前提に進められているように思われる。しかしながら『形而上学』においては、直接魂の原因性を主題化する傾向が見られず、そのことが形相としての魂の持つ役割についての理解を困難にしている原因の一つとなっている。ただ、実体の「原理」「原因」としての側面の考察に移るZ巻第17章の観点は、始動因としての実体と定義の関わりについて、一つの示唆を与えるものと思われる。事物を当の事物たらしめる原因は、定義・説明の水準では (*noyaktos*) 本質であるが、そこでアリストテレスは、その原因としての在り方を目的因と始動因(第一にそれを動かしたものと)に分け、前者を事物の「あること」の原因として、後者を事物の「生成と消滅」の原因として探し求められるものとしている(Z17, 1041a26-33)⁽⁶⁾。家や寝台等の人工物の本質と、雷鳴のような自然物の本質が、両者の区別の例として示されている。「家」は或る特定の役割「覆い」を果たすために「石や煉瓦」から作り出されたものとして説明されるのに対し、「雷鳴」は、「雲」の中で「火が消える事」(*Anaphica posteriora*, II 8, 98b8) によって生み出されたものとして説明される。これらの例によって、事物の本質が場合に依じて目的因と始動因のどちらとしても説明され得る事が指摘されている。つまり目的因と始動因は、それが説明の水準の本質をなす限り、同様に事物の形相因たりうるとする認識を、ここに認める事ができるので

ある。では生成と消滅に関わる「人間」の例は、この論理の形式でどのように取り扱われるのであろうか？

記述から直接の回答を得る事はできない。つまり魂が、始動因として本質を説明する形相という形で捉えられていると直接了解させる記述は見られない。だが上に見たように、人間の例の場合、人間を生きたものたらしめる原因としての魂が種概念の説明に関与しなければならぬという事が、事実上示唆されていることは認められなければならない。一つの可能性として次のような解釈が考えられよう。既に述べたように、定義における類としての質料的記述の必要性は繰り返し指摘されている。しかし石や煉瓦が「石や煉瓦からなる」と単純な記述の変更によって類化するのに対し、人間の質料すなわち肉体（骨や肉）は、そのままの形では類化し得ない事に注意しなければならない。この事の意味は次のように理解できる。つまりそれらは生命を持った諸部分・諸器官としての在り方を含んだ記述に変更されない限り、「人間」の定義の類たることはできない。あくまで「生命を持つ」器官を備えた肉体としての何ものか、すなわち「動物」(ζῷον)という記述となることで質料としての類となり得ているのである。「二本足の動物」という説明を、そのような形で「魂」に触れていると考える事は可能であろう。つまりそれに触れる事によってその説明は「生きた」人間の定義たり得ていると解釈することができる。そしてもし人間の本質の説明は魂の説明である」という発言の内容をこのように理解するならば、人間の形相の説明を種差による類の規定とする一連の発言との衝突は避けられるはずである。確かに人間の形相は、発生の目的という側面からは、生じた当の人によって獲得されているはずの種概念である。しかし始動因性という側面からは運動の原因、生命の原因としての魂を考えなければならない。そして両者は、「説明の水準では」本質として一つの定義をなすものとなっている、すなわち種概念を説明する事が、同時に魂を説明する事になっていると理解できるのである。魂を説明・概念(λόγος)としての形相とみなす『デ・アニマ』の基本姿勢も、同様の論理に基づいているものと考えてよいであろう。

「魂は、それによつて第一に我々が生き、感覚し、思考するところのものである。それ故、それはある種の説明・概念であり、形相なのであつて、質料ないし基体ではない」(De an., II, 2, 414a12-13)⁽⁹⁾。

心臓部に定位される魂

これまで見てきたように、定義論におけるアリストテレスの二つの立場は、実際には実体の実在性と可認識性について、質料、形相という共通の原理から論じようとする一つの思考の傾向の中にあるものとして捉える事ができるように思われる。少なくとも、種と魂に対する姿勢は、質料形相論という大きな枠組みの中で互いに排除し合うものではなかったと言つてよいであらう。ところが、結合体、すなわち生成物としての人間に関するアリストテレスの記述を詳しく見ていくと、このような枠組みの内にはおさまり切らないような、さらに別の観点の存在を確認できるのである。

『形而上学』第7巻でアリストテレスが実体論に生成論的思考を持ち出すのは第7章である。以下第9章まで文脈は一貫するが、この三つの章がその前後のやはり一貫性を持った議論、すなわち本質、定義に関わる議論の流れを分断する位置に置かれている意図は表面的には理解しにくい。生成論的視点は定義という主題を扱う際どのような役割を果たしたのか。第7・8章と第10章の関係をもう少し具体的に把握し直してみることにする。まず第8章では、事物を生成物としてみる際、その原因を始動因に帰すべきとしている。

「〔…〕むしろ生むものが作り出すだけで、そしてそれが質料の中における形相の原因となるだけで十分である。全体とは、これこれの〔特定の〕骨や肉における、このような〔何ものかとしての〕形相であり、それがカリアスやソクラテスなのである。彼らは質料の故に異なっている。それぞれの質料は異なるのであるから。だが形相においては同じである。形相は不可分であるから」(Metaph., Z8, 1034a4-8)。

「生まれた」結合体が、その発生の原因を、生んだものの内に持つとされる時、その原因すなわち「同種の」(ὁμοειδής, Z7, 1032a24) 他の個体の中に、種的形相の觀念が現れている。生成という過程を考える場合、「生き」た」結合体の原因としての魂とは別に、種の問題が表面化することになる事に注意したい。この事は第一に、生成論と、続くZ巻第10章の主題である定義・種概念の説明法についての考察の間の連続性を確認させる。そして第10章の議論は生成物とのアナロジーによる定義の説明要素の分析を行うのである。

第10章は冒頭で二つの問いを立てる。第一に、定義される事物の部分の説明は全体の説明に含まれるか、という問い。第二に、部分は全体に含まれるのか、という問いである。第一の問いに答えてアリストテレスは、「語句」の場合における「字母」のような形相の部分は定義に含まれるが、人間における骨や肉、線や円におけるそれらの切片、等の結合体の部分としての質料の説明は定義に含まれないと述べる。結合体は、「それがそこへと解体する(滅びる)ところのものを原理としてそこから成り立っている」(Z10, 1035a24-25)が、形相の場合はそのようなものから成るのではない。すなわちそれは結合体の部分としての生成の質料を部分として持つものではないために、その説明を自らの説明の内を持つ必要はないというのである。ここで既に明らかのように、アリストテレスは、定義における説明の構造という論理的な問題に対し、それを生成論的な思考法の助けを借りて解こうとする姿勢をとっている。「滅びる」という用語がそのことをよく表している。そして同じ姿勢は、第二の問いに対する回答の中にも表れている。「説明がそこへと分割されるような部分は、そのすべてか、あるいはその或るものは「説明全体より」先である」(Z10, 1035b4-6)。「質料としての部分、それを質料とし「全体が」そこへと分割されるところの部分」は、「全体より」後」であり、「説明」の部分、「説明としての実体の部分」は、「そのすべてか、あるいはその或るものは、より先である」(Z10, 1035b11-14)。アリストテレスは例として直角や人間が、説明の水準で鋭角や指に先立つものである事を示す。明らかのように、ここでそれらの論理的優位性と存在における先

行性の認識は思考上重なり合っている。実際、既に問いが提示された直後の記述で、直角や人間という全体が鋭角や指という部分に先立つと考えられるという回答が先取りされ、論拠が「説明において (τὸ πρῶτον) 前者は後者なしに説明され、かつ存在においても (κατὰ τὴν ἐξουσίαν) 後者なしに存在しうるものであるから」と述べられた時点で、そうした考察の姿勢ははつきりと前面に出されているのである。すなわち第7・8章から得られた生成論的視点は、定義の要素の論理的優位性と存在における時間的先行性との間のアナロジーを成立させるために必要であったと考える事ができる。そのような意味で、三つの章は第10章の議論の展開に備えるものだった訳である。アリストテレスの思考の一貫性は確認されたと言つてよい。

ところが、「人間」の部分と全体についての生成論的思考、具体的には「より先」「より後」という時間的前後の観点を用いた思考は、さらにアリストテレスを、これまでの議論と(表面的には)つながりを持たない、別の議論の観点へと誘導することになるのである。もう一度形相の部分の先行性についての指摘に注目してみる。注意を引きつけるのは、繰り返される挿入句による制限「すべてないし或るものは」である。この表現によつてアリストテレスは何を意味しようとしているのか。

第10章で魂が「生命を持つものの実体、形相、本質」とされた事については既に触れた。ここではその後の記述に注目したい。それは生成論的「先行性」の言葉を用いた、部分と全体の優位性を巡る議論の流れを引き継いで次のように続く。

「それ(の魂)の諸部分は、そのすべての、またはその或るものは、結合対たる動物よりも先である。(…)しかし質料とその部分はそのような実体より後である。そしてこのような部分を質料としてそこへと分割されるのはこの実体ではなく、結合体の方である。従つてこのような諸部分は、或る意味では結合体より先であるが、他の意味ではそうではない(…)」(Z10, 1035b18-23)。

この、質料的部分が「より後」となる場合の例として人間（生物）と指の場合を示した後、さらにアリストテレスは次のように述べる。

「しかしそのような諸部分の内、或るものどもは同時にある。つまり、その中に説明と実体が第一に内在するような、優位に立つ部分がそれである。たとえば脳や心臓がそうである。どちらがそのような部分であろうと違いはない」(ibid., b25-27)

説明、形相としての魂がその「中」に存するような「優位の部分」は、結合体より先でも後でもなく、「同時」であるという。そして具体的に脳、心臓といった特殊な器官への言及がなされている。魂が特定の器官に宿するという見解は、議論全体の流れの中では主導的な役割を果たす要素ではない。しかしながらその観点の異質さは際立っている。そもそもアリストテレスが質料、形相という原理を用いて人間を捉え思考する時、念頭には魂と肉体がそれぞれ独立した二つの実体であると考える二元論の発想を否定する方針が置かれていたはずである。『デアニマ』で魂は肉体の現実体としての形相とされるように (*De an.*, II, 414a14 sqq.)、質料形相論の思考の範囲内で魂が肉体の「中にある」(ibid., a21)、『骨や肉の「中における」』(*Metaph.* Z8, 1034a6) 形相と言われる場合、その表現は、質料と形相の原理としての結合によって一つの実体が現実化する事の説明として用いられている。繰り返し述べられるように魂は説明、本質に関わる実体であって、実在の水準での実体ではない。実在するのはあくまでそれと質料との「結合体」なのである。この事を考える時、我々の目には『形而上学』第7巻第10章の生成論的観点が、論理学的観点で捕捉可能な領域外の主題への言及にアリストテレスを誘導しているように映るのである。魂が特定の器官をその固有の座とし、そこに宿するという見解は、見方次第では、何らかの実在性を持った魂の存在を前提したもののようにも思われるからである。しかしながらこのような器官論の思考から直ちに文字通りの二元論的思考を連想する姿勢はやや安易であろう。確かにそれはアリストテレスの通常の質料形相論

の思考とは異なる角度からの人間の在り方の記述と見なさざるを得ないが、その思考と矛盾するものとしてアリストテレス自身が見なしている事実は認められないのである。⁷⁾

以上から明らかになった事は、『形而上学』を貫く質料形相論の思考の見地から種的形相と魂としての形相という二つの人間の形相を論じつつ、アリストテレスが、生成物としての人間を扱う議論の延長線において、特定の肉体的部位に定位される魂という機械的器官論の見地からの指摘を同時に行っているという事実である。こうした二つの異なる観点の同居する思考は、生成・繁殖を直接の主題とする『動物発生論』の内部にも確認できる。例えば、発生において形相を有する始動因は「雄」(*De generatione animalium*, II, 732a4-5, 8-9)だとされた後、「熱」の源としての「心臓」についての記述に連続して、「[...]雄の原理、原因はこの器官であり、そこにそれは存する」(IV, 776b3-4)と述べられるが、ここでは種的形相と器官に宿る魂という二つの概念は、単に並存しているというよりも一つに結びついている。形相としての魂についても同様である。感覚を行う魂を、生命を持ったものの「説明・概念(*λογος*)」(II, 741a9-13)と、⁸⁾「感覚の原理は心臓の内にある」(II, 743b25-26)と述べる際のアリストテレスの思考は、形相論と機械的器官論を抵抗なく結合させている。また『形而上学』第10章との一致という点では、「部分」についての次の発言に注目すべきである。

「この器官(*σκιμασία*)は、まさに目的の部分である。それは一にして最も優位に立つ部分であり[...]すべての自然の始まり(*ἀρχή*)と終わり(*τέλος*)を持つ。[...]動かすものとして、それは最初にあり、目的の部分として、それは全体と共にある」(*De gen. an.*, II, 6, 742a34-b3)。

目的(形相)の部分たる心臓は全体と「共に」あるとする発言は『形而上学』第10章の「或る部分」は「同時」という記述⁹⁾に重なる。そしてここでもまた、質料形相論の言語が機械的器官論の言語と結合しているのを確かめる事ができる。

道具としての肉体——魂の始動因性の説明——

このような二つの観点の並立、結合という問題に関し、それでは魂を主題とし、質料形相論の言語による論理立てが主導的な『デアニマ』の内部では、その記述からどのような教示が得られるだろうか。ここでは「食物」に関する記述に手掛かりを求めてみたい。第2巻第4章は魂の栄養摂取能力について、その原理を、その能力の持ち主の「存在を保つ」ための「力」としているが、「そのものの現実活動を用意する」ものは「食物」と指摘している。生きているものは栄養摂取能力を持ち、かつそれを働かせることで生きている。その活動を可能にするのが食物だという。さてこの議論では三つの対象が扱われている。すなわち「養われるもの」「それによって養われるところのそれ」(ἐκτροφέναι)「養うもの」。アリストテレスは、「養うもの」としての「第一の魂」栄養摂取を行う魂が、その魂を持つもの、つまり「養われるもの」を養う際の手段「それによって…」として、食物を位置づけている(II 416b20-23)。ところが魂が用いる手段はさらに「手」と「權(オール)」のたとえを用いて「動かすのみのもの」と「動かされて動かすもの」の二つに分類される(II 416b25-27)⁽⁵⁾。後者が食物を指す事は明らかであろう。そして「動かすのみのもの」としては、おそらく心臓が考えられている。食物は消化される必要があるが、消化を行うのは「熱」だとされている(II 416b28-29)事がそれを理解させる。『動物発生論』において心臓が熱の源として捉えられていた事、またそれが生成の原理として「動かすもの」と述べられていた事を思い出すべきであろう。そしてこのような言及が食物との関連においてなされているということは、それが種的形相の文脈から離れてなされた発言ではないということの意味する。栄養摂取能力についての考察の流れの中で、この能力が種の「繁殖の」能力と一つのものであるという事実が注意が促されている(De an., II 416a19-20, b23-25)のを見逃してはならない。

『デ・アニマ』において魂の扱いが一貫して質料形相論の枠組み内にあるという事に疑問の余地はない。魂が（器官を持った物体・肉体の）現実体であり、説明としての形相であるとする見解が揺らぐことはない。しかしながら今見たように、繁殖という生成の運動に関わる議論を見る時、魂と其の用いる手段（おそらく心臓）という機械的器官論の思考がそこに働いているという事実が気付く。そればかりか、さらに「発声」についての記述（II 8,420b13sq.）では、先に『形而上学』『動物発生論』で確かめられたのと同様の、魂の局在化という発想が見出されるのである。「内的熱」をもたらず呼吸と、肺及び心臓部との関係について述べた後に、次のような言葉が続く。

「これらの器官の中の魂によってもたらされた、気管と呼ばれる部分に対する、吸入された空気の衝撃が、声である」（*De an.*, II 8,420b27-29）。

魂の、特定の肉体部分の「内部」への定位を行う器官論の発想が、やはりここでも、確認できるのである。

『デ・アニマ』の器官論の見地もまた、始動因としての魂の在り方に向けられたアリストテレスの関心から発しているものであろう事は容易に想像できる。だが魂の始動因としての原因性は、その目的因としてのそれと密接に結びついたものとして論じられてるように思われる。まず目的に関して述べられている事柄を理解しなければならぬ。第2巻第2章で魂を形相因として位置づけた後で、第4章は次のように視点を変える。

「魂は、そのために（何かがなされる）と言われる際の意味での（*αἰὸν ὁ ἐνεκεν*）原因でもある。知性が何かのために働くのと同じ仕方、自然もまた（何かのために）あるが、それはその目的（*τέλος*）であるから。そのようなものは自然の在り方においては、生命を持つものの中の魂である。というのも、すべての自然的な物体・肉体は魂の道具器官（*ὄργανα ὄργανα*）なのであるから。動物同様、植物の場合もそうである。魂のためにあるものなのであるから。だが「ために」は二通りに言われる。目的（*τὸ οὖν*）と受益者（*τὸ ἕνεκα*）」

(*De an.*, II,415b15-21)。

後半部の意図は一見明確でない。アリストテレスは目的因としての魂を、肉体との関係において論じようとしている訳であるが、生物の肉体が魂の「ために」あると言われる際の意味は、挙げられた二つの意味の内のどちらを考へべきとされているのか。Lefèvreは、ここでは二つの意味の選択が問題となつてゐるのではなく、「ために」の意味の二重性をそのまま魂の原因性の在り方に重ね合わせて理解する事が求められてゐると考へてゐる⁽⁹⁾。「ために」の二重性について同様の仕方で触れられてゐる他の箇所⁽¹⁰⁾の記述が、この問題考へるのに役立つ。上の引用箇所⁽¹¹⁾にやや先だつて、「自らに似たもの」すなわち同種の他の個体を作り出す事としての発生を、アリストテレスは、「それによつて」〔各々が〕可能な限りの仕方⁽¹²⁾で、永遠的なもの、神的なものに与かるため (*ἕνεκα τούτου*) の活動と述べ、こう付け加える。

「そのようなものを、すべてのものは求めるからであり (*ἕνεκα τούτου ἀπαιτεῖται*)、自然に従つて活動する限りのものどもは、そのようなもののために (*ἕνεκα τούτου*) 活動するからである。「ために」は二つの意味を持つ。すなわち目的と受益者」(*De an.*, II,415a26-b3)。

ここでは最後の言葉がはっきりした役割を担つてゐる。永遠性を「求めて」生命を持つものの繁殖活動が行われる事は明らかである。だがそのものが永遠性に与れるのは、自らが繁殖という活動を通して(その結果として)種の永遠性を成り立たせる事に参加し、その「ために」役立つことにおいてである事が忘れられてはならないだろう。ここでは、種に永遠性を与えるべく、すなわち種のための永遠性を成り立たせるべく活動する事が同時に自らの永遠性を求める事でもあるという事実を、「ために」の両犠牲についての指摘を通じて示唆しようとする意図を読み取れるのである。つまりこの箇所の *ἕνεκα* はおそらく両義的である。また実際このような意図を汲むこと、この後に続く記述との連続性も分かりやすくなる。そこでは、個体が自らの「継続的な」在り方、ではなく、

「数においては一ではないが種においては一である、自分に似たもの」の継続という形で永遠性に与かるといふ事が、すぐに説明されることになるのである (b3-7)。

魂の原因性に触れた先の引用箇所についても、この「ために」の両犠牲という観点をを用いて理解する事を *Lefevre* は提案する。彼がそうする理由は、そのように理解する事で魂の始動因性が議論の主題として浮上して行く過程が分かりやすくなるからである。*Lefevre* も指摘するように、この語は「器官」及び「道具」の二通りの意味を持ち得る点に注意したい。この事実と、「ために」について上に述べられた事柄は互いに結びついている。そしてこの結びつきは、魂の原因性の主題に我々を立ち返らせることになるのである。まず、「器官」とは、生命を持つものの部分であるが、それが「生命を持つもの」の器官（死んだ器官は同音意義的にしか器官と呼ばれえない）でありうるのは、魂という現実態によって生きたものとして実現しているからであった。つまり説明としての形相の現実態の水準に達している生成物の部分、それが（生きた）器官である。そして生成とはその水準に達する事を「目的」とするものであった（魂 \parallel $\sigma\theta$ ）。ところでこの器官は同時に「道具」でもある。諸器官はそれぞれ分化、特殊化し、互いに取り替えが不可能な固有の役割を与えられている。つまりその意味で、そのどれもが魂の機能を働かせる上で不可欠である。それ故、魂は何らかの器官を手段として用い、また何らかの器官の「中に」宿り、そこで活動するとさえ見なされる事になる（魂 \parallel $\tau\theta\sigma$ ）。魂の「ための」「道具」としての *dypana* を考える時、魂の心臓部への定位、局在化という機械論的思考という問題と密接に結びついていた魂の原因性、すなわち始動因としての在り方が主題として姿を現している事に気付く。アリストテレスは、魂が繁殖・生成の目指す目的として、生命を持つものを形相的に規定する（形而上学の言語で言えば、この形相の説明すなわち概念の説明が本質である）事に言及しながら、他方で魂がそれを「道具」として使う事で、同時にその活動の原理となっているという事実にも触れている。すなわち *dypana* 及び「ために」の両犠牲は、魂の目的因としての原

因性の考察から、始動因としての原因性の考察への議論の移行という流れをもたらししているのである。この後の議論が、場所的運動、性質変化、成長増大の原因としての魂の在り方の検討に移っている（II4,415b21-28）という事実によってもこの事は裏付けられるであろう。

以上見てきたことから『形而上学』『動物発生論』に関してと同様、『デ・アニマ』に関しても、その議論内部における質料形相論の言語と機械論的器官論の言語の併存、結合という事実が確認されたことになる。振り返ってみると、3つの著作はいずれも魂の始動因としての働きの説明との関わりで、質料形相論の枠組みの中に機械的器官論の図式を持ち込んでいた事が分かる。とりわけ『デ・アニマ』においては、この図式は魂の原因性についての議論を行う上で積極的に援用されるべく用意されたものであった。二つの観点は、そのような範囲内で互いに関わり合うものだったと言つてよいであろう。

これまでの議論を大まかに振り返つておく。①『形而上学』の实体論は、実体の可認識性と实在性を論理的観点及び生成論的観点からそれぞれ論じるために「人間」の例を用い、普遍的種と普遍的質料（類）、魂と個的質料という二系統の質料形相論的図式を示した。図式上の二つの形相——種的形相、魂としての形相——は、互いに無関係なものではなく、一つの本質の目的因としての姿と始動因としての姿に対応されるべきものであった。一方そのその始動因としての在り方の考察を行うための生成論的思考の中で、特定の器官内部への魂の定位という機械的器官論の図式が同時に示されていた。②『動物発生論』においても質料形相論的な用語法と機械論的な用語法の並存を指摘できるが、そこでは二つの観点はむしろ積極的に関わり合う。また魂の始動因性についても、『形而上学』よりもさらに明確な言葉による言及がなされる。③『デ・アニマ』では、道具としての肉体とそれを用いる魂という機械的器官論の発想が、形相因としての魂の始動因性についての議論を、その目的因性について

の議論と一体のものにし、原因としての魂の側面の分析を完結させていた。すなわち、機械的器官論の図式が質料形相論において積極的に援用されていた。

こうして見てくると、質料形相論の内部の二つの図式は形而上学が扱う実体論の文脈で、質料形相論内の図式と機械的器官論の図式は自然学が扱う原因論の文脈で、互いを補って議論を完結させるものであった事が確かめられる。既に述べたように実際には、魂を持った人間、及びその定義と認識を巡る『形而上学』の記述に論理の動揺が見られる事は認めざるを得ない。しかしそれは、その議論が、魂という形相が種概念の記述の中でいかに認識されるか、あるいは魂としての形相と種としての形相はどのような関係にあるのか、という、『動物発生論』及び『デ・アニマ』が表立って問題にしていない主題にある程度踏み込みつつあるという事情にも照らして理解すべきであろう。解釈上の問題点は残るものの、自然的事物としての存在物の在り方に関わる説明と、その事物の本質の在り方についての形而上学の水準での解釈とを、何らかの形で統合しようとするアリストテレスの姿勢が記述の背後に存在するという事実は、最低限認められる必要があるのではないかと思われる。いずれにしろ、一見相互に矛盾するかのような多くの異なる観点の並立が、アリストテレスの世界観をむしろ統一へ向かわせている場合の例として、「種と魂」についての記述を取り上げる事は無意味ではない。それを示す事がこの論文の目的であった。

注

(1) 彼がいわゆる部分形相として考えるのはrationalitasであって、アリストテレスが直接言及している結合体の部分としての魂ではない。Sousの立場は、「理性的動物」という記述で「人間」の定義を表すことを議論の前提とし、魂をrationalitasとしよう一種の概念として一旦捉え直すことで、種の形相と魂との関わりを解釈しようとする中世の

解釈者の伝統な議論の内側にあつたことに注意する必要がある。彼の解釈については、v. W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics*, text and comm., Oxford, 1924, p. CIV. これに対し Averroes は、形相という用語が、質料と対比されるものとしてのみ用いられていると見なした。従つて肉体から区別された要素としての魂 (rationalitas) ではないのみを、人間の形相として捉える事になり、この点で種・本質 (形相と普遍的質料との合成) としての形相のみを認めようとする Avicenna の解釈 (後に Thomas がこれに従う事になる) と対立する事となった。v. B. Dumoulin, *Anabase génétique de la Métaphysique d'Aristote*, Les Belles Lettres, 1986, p. 229 sqq.

(2) 後述するように、問題は、Z10において定義は形相のみに関すると明言され、Z11の後半で人間の魂が定義対象としての形相とされている事実と、Z11の前半で、定義の記述は質料を含むと述べられている事実との対立、という点に帰する。Dumoulin は、記述上の対立を、*éidos* という語が持つ得る二つの意味——形相 (魂) と本質 (魂 + 普遍的質料)——の未分化ないし混同として説明し、問題の解決として、Z11後半及び Z10 を Z11前半よりも後期の思想に属するものとする可能性を示唆している (op. cit. pp. 228-230)。しかしながら定義内部で質料的要素と結合する要素を魂とする伝統的な構図には記述上の根拠はない。形相と本質との対立という視点は問題を見えにくくするだけのように思われる。

(3) *Metaphysica*, Z10, 1035b27-30. 次注参照。

(4) *Metaph.*, Z12, 1038a5-9. 実在としての結合体の質料と記述における定義のための質料の区別 (普遍的質料 / 個的質料) は重要な論点であるが、今回は中心的に取り上げる事はしない。ただ、しばしば両者の区別が曖昧である事が、形相 (種 / 魂) を巡る記述の混乱と結びついていて、と考えられる点を指摘しておく。

(5) Ross, op. cit., II, p. 223. 以下、*τοῦτο... τοῦτο... λόγου* (a28) を読む。

(6) つまり事物の何たるかはその形相によつて第一に説明されるが、生命を持つものの場合それは必然的に、魂による事を意味するのである (v. R. D. Hicks, *Aristotle De Anima*, text, trad., comm., Cambridge, 1907, p. 329)。

(7) Nuyens は、魂と肉体の関係についての解釈の変遷という点から、アリストテレスの思想を二つの発展段階に分けて考えた (F. Nuyens, *L'évolution de la psychologie d'Aristote*, Louvain, 1948, pp. 56-59, 161-163, 177 sqq.)。それによると、心臓部への魂の定位は、生物学的著作群に特有の instrumentisme mécaniste の思考段階に属し、『エウデモス』に認められる、魂と肉体とが互いに対立し合う二元論的な dualisme から、『エウデモス』の hylémorphis-

meに至る中間の過程を表すとされる。この段階ではまだ質料形相論における魂と肉体の実体的結合は考えられておらず、両者の結合は未だに二つの「もの」同士の間付帯的な関係と捉えられているという。ただし、Nuyens は『形而上学』を『デ・アニマ』と共にhylomorphicな段階に属するものとし、それらの内に見出せる魂の定位への言及を黙殺している点で、後に Lefèvre の批判を招く事となった (v. Ch.Lefèvre, *Sur l'évolution d'Aristote en psychologie*, Louvain, 1972 pp. 112-155)。

(8) 「魂の部分」に関する記述 (Metaph. Z10, 1035b18-23) を、この稿では直後の「質料的部分」(心臓)の議論との関わりから考察しようとしているが、本来は1035b4-14でなされている「説明の部分」についての記述との関連から解釈されるべきものかもしれない。ただ、そう解釈し、定義と同時にある部分として「最下の種差」を考えただ場合 (Ross, op cit., pp. 198-199)、その議論が魂と肉体に関する議論への導入としてどのように働くのか、考えにくくなることになる。

(9) *κινουμένης* (25) を採る。この2つのtext及び前後の文意の解釈は Lefèvreに従うこととする。v. Lefèvre, op. cit., p. 130 sqq.

(10) Lefèvre, op. cit., p. 140